減災安全都市を目指して

【活動内容の特徴】

指定避難所の備品転倒防止対策実施

指定避難所でもある中津川市内の全市立保・幼・小・中学校の備品転倒防止対策を実施しました。

【団体の紹介】

●活動地域：中津川市内全域
●取り組み期間：2016年～2020年の５年間
●会員人数：実働人数 ７１人／会員 １１７人
●アピールポイント：地域の安全安心にかかわる様々な活動を実施しています。今回もその流れの一環で、今年度は教育委員会の業務委託団体の指定を受けています。

【アピールしたい防災活動の成果】

非常時の安全性が向上した

災害弱者や高齢者、子供たち、地域の方たちの命を守る指定避難所の安全性を向上させる事が出来、大災害時でも確実・迅速に活用できるようになった。

多くの団体・組織と連携できた

作業は会員以外にＰＴＡ役員・保護者や中津川ロータリークラブ様の会員企業の社員、地域の防災士にも協力を呼び掛け参加していただけた。

【活動内容の詳細】

市内の様々な団体と連携して実施

●市・教育委員会、社協、警察署、消防団などの行政機関や社会奉仕団体とも連携を図り計画的に家具や備品の転倒防止を実施した。
●実績
　2016年：学童保育所 １８施設、児童館 ４施設
　2017年：社協、ディサービス他 １４施設
　2018年：小学校 １９校
　2019年：中学校 １２校
　2020年：保幼稚園、子供園 ２０園
　その他：公民館 ２館、障がい者宅 ３５戸
　　民間特別養護老人ホーム ７施設
●延べ参加人数：１，８５５人
●延べ備品固定箇所：５，５１１箇所

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

●市内の全１５地区に防災に係わりが深い組織を中心とした「地区防災連絡協議会」の結成を提案しているが、今回の地域住民の拠点でもある学校での作業という「具体的な活動」を提案したことで、上記組織結成への大きな一歩となった。
●今後の備品の移動などの対応に関連し、学校や教育委員会との窓口ができた。

＜参加者等から見た効果＞

●「自分の命は自分で守る。」ことの具体例が示され、防災について考える機会となった。
●「非常時の避難所」や「地域の中の自分が地域のためにできること」などを考える機会となった。

コロナ禍の防災活動

【活動内容の特徴】

Zoomを取り入れた活動

Zoomを導入しコロナ禍でも防災活動を継続する
複数町内で在宅型防災訓練の基礎を作り上げる
在宅型防災訓練を各町内で実施
訓練により見えてきた課題に取り組む

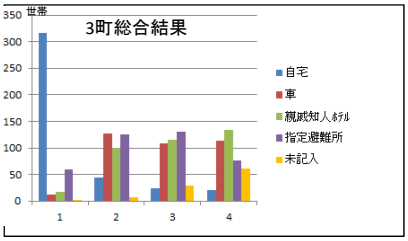
【団体の紹介】

・ 大垣市立星和中学校、近隣地域
・2017年4月～現在（4年目）
・役員20名、総人数約1,300名
・『複数地域が取り組む避難所運営』
地域の垣根を越えて、助け合い、知恵を出し合って「避難所運営」と防災活動に取り組んでいます。

【アピールしたい防災活動の成果】

在宅型防災訓練（全世帯アンケート）平均回収率　83.2%

- 一番目はどの地域も在宅避難を考える人が多い
- **2番目は地域によって違っている**
- 在宅人数の把握方法や、どこで車中泊を考えているかなどの**課題が見えてきた**。



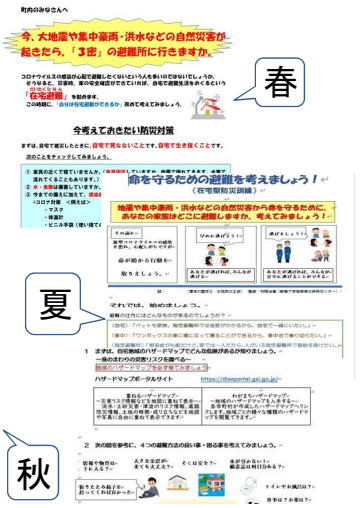
【活動内容の詳細】

話し合いを重ね**同一様式**で実施（在宅型防災訓練）

オンライン活動（春~現在まで）

案を出す→　各地域が意見をだす　→　改良を重ねる
全員が納得したものを作る　→　全世帯に配布する。

- **春：全世帯当てに新型コロナウイルス対策を知らせる（回覧）**
  - 新型コロナウイルス対策を取った避難所について学ぶ
- **夏：今、災害が起きたらどこへ避難するのかアンケート実施**
  - 避難先がどこでも、困る事は多くあることを知ってもらう
  - アンケート結果を全員で共有。**課題が見えた。**
- **秋：対面活動**
  - 学校清掃ボランティアに参加
  - 学校関係者とペットスペース、洗濯物干し場などの配置を相談



【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

- 新型コロナウイルスやその対策について学ぶことができた。
- 複数地域で話し合うことで、アンケートなど内容が良くなった。
- 共通アンケートで、災害時の不安や問題を共有し、軽減のために知恵を出し合えた。
- 住民意識の向上が高回収率につながった。

＜参加者等から見た効果＞

（回覧板）感染症対策を考える機会を作った。
（アンケート）
災害時要援護者台帳に登録されている人だけでなく、登録していない人も、抱えている大きな不安を率直に記入できた。
家庭内での話し合いが、昨年まで訓練に不参加の人も含め住民の意識を高めた。

守ろう自分の命、家族の命　～高める防災力の輪～

【活動内容の特徴】

学校・家庭・地域の防災力を高め
防災力の輪を強化

・学校、家庭、地域の繋がりある防災力を一つの輪と考え、それぞれの防災力を高め、災害時に連携し、命を守り切ることができるようにする。

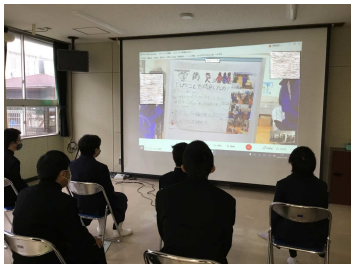
【団体の紹介】

・大垣市
・令和２年４月～現在
・児童生徒２３４人、職員１５５人
・内閣府主催の防災教育チャレンジプランに参加し、防災教育に関する新たな活動にチャレンジしています。

【アピールしたい防災活動の成果】

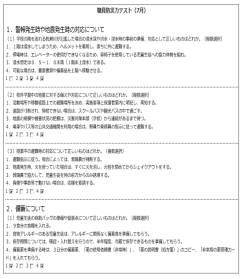
新型コロナ禍でチャレンジした様々な防災活動

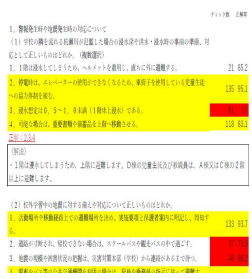
今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で学習計画や行事計画を大きく変更しました。その中でも、ＩＣＴを活用した防災活動等、学校と家庭、地域の防災力を高める様々な取組みを実践しました。



【活動内容の詳細】

学校・家庭・地域の防災力を一つの輪に





◆学校
（１）職員防災力テスト
・学校防災計画（災害対応マニュアル）の職員周知のため、グループウェアを用いて毎月実施　＊自校の課題を共有
（２）生活単元学習での防災学習
・小学部５年生・・・「町探検」を通して危険場所を確認
・中学部３年生・・・他県の特別支援学校とのオンライン交流授業
・高等部３年生・・・修学旅行の事前学習でハザードマップを作成し、避難場所を確認

◆家庭
（１）災害伝言ダイヤルクイズ
・災害伝言ダイヤル体験期間を利用し、学校が録音した音声を聞きクイズに答える取組みを実施

◆地域
（１）合同研修会（避難所運営について）
・自治会と合同研修会（ＨＵＧ）を実施し、避難所開放場所を確認

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

●様々な活動に取り組むことで、防災に対する意識の高まりを感じ、新たな防災学習の形を見つけることができた。
●地域住民や専門家、他校との繋がりができ、災害発生時によりスムーズに対応できる体制を少しずつ整えることができた。

＜参加者等から見た効果＞

●学校防災計画（災害対応マニュアル）の周知は、マニュアルの配付で終わりがちだが、全職員が確認し、課題を共有できた。
●様々な人と繋がりながら防災活動を進めることで、特別支援学校における防災活動を知り、防災と多様性について考えることができた。

大八防災プロジェクト2020

【活動内容の特徴】

多角的な防災啓蒙アプローチ

小学生、中学生、乳幼児家族、シニア世代まで年代に応じた防災ワークショップ等の企画実施や全戸配布の広報紙やホームページを通して広く防災啓蒙をした。

また、地域学校協働活動の一環として、東山中学校との連携で町内会毎の防災マップを作成した。

【団体の紹介】

・高山市大八地区（１６町内会）
・平成27年4月1日設立
・令和2年度より地域学校協働活動を実施

【アピールしたい防災活動の成果】

わたしが考える　みんなで考える防災

◎防災への関心を高め、自分のこととして考えるきっかけ作り
◎家族や友人、地域で防災を考える場の創造
◎多様な活動団体等の協働による多くの住民の参画・参加

【活動内容の詳細】

年間を通した防災啓蒙活動と連携

①東山中学全校生徒に防災テーマのニュースレター配布
②東小学校4～6年生対象　防災マップ探検隊
③東山中学3年生対象　防災マップ作成・避難所設営体験
④町内会＆大八まちづくり協議会役員対象　防災研修会開催
⑤知っ得ランチ　65歳以上対象　ハザードマップについて
⑥郷土の未来を語る会　東山中学校　防災マップの提案
（大八キッズ⑤乳幼児家族と防災０-３歳児の家族　1/15予定）

小中学校、高山市危機管理課、高山市社会福祉協議会、警察官、地元消防団、民生児童委員、高山市民防災研究会、NPO飛騨わらべうたの会、地域在住の防災士等との協働により活動の幅が広がり、多くの住民が参画、参加することができた。

全戸配布の広報紙に住民意識アンケートデーターを用いた防災記事を掲載し、広く啓蒙した。

現在、大八地区防災計画検討委員会を立ち上げ、計画の作成や啓蒙パンフレット作成準備をしている。

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

・体験型のプログラムを取り入れたことにより、ひとりひとりが自分のこととして防災を考えるきっかけになった。
・様々な世代を対象にすることにより、年齢やニーズに応じた啓蒙活動ができた。
・行政、NPO団体、市民活動団体との連携により、活動の幅が広がった。

＜参加者等から見た効果＞

・危ないところがいくつもあった。これからはもっと気をつけたい　（東小４年生）
・避難所で自分にできることがあるとわかった。もしもの時は自分も役にたちたい。家でも避難について話したい。（東山中３年生）
・パーティションなどの備蓄を町内会でも考えるきっかけになった　（町内会長）

みんなで作ろう使おう、災害資料と記録

【活動内容の特徴】

地域の災害記録を集める･使う

・記録収集　ー　当時の写真や冊子などを収集
・保　　管　ー　東北大学のサーバーに保管蓄積
・公　　開　ー　災害アーカイブぎふのHP上で公開
・活用と伝承ー　ワークショップなどを通して伝承

【団体の紹介】

・岐阜県全域ほか
・2019年2月～現在　(約2年ほど)
・実働人数６人／総人数９人
・私たちは過去の災害記録を後世に残し、活用することで地域を知り備えにつながるよう取り組んでいます。

【アピールしたい防災活動の成果】

「災害を知る」大切さを知る

- 対面で地図と向き合って地域で起きた災害を思い出す。
- 子供たちが当時を知る地域の人の話を、見たり聞いたりしながら災害を学ぶ。
- Zoomを使って、当時を思い出し今ならどうするかを話し合う

県内でアーカイブ化始動

災害の記憶
写真で継承

地域防災に活用

【活動内容の詳細】

ワークショップの形はいろいろ

- 対面で地図や写真と向き合って、地域で起きた災害を話し合うことで改めて思い出すと同時に、備えることの大切さを知る。

- 子供たちが当時を知る地域の人の話を聞いたり、ハザードマップを見たりしながら住んでいる地域で起きた災害を学ぶ。

- オンライン（Zoom）を使ってワークショップ、当時の写真を見ながら思い出し、現在のハザードマップを確認し、今起きたらいつ、どこへ避難するのかを話し合う。

- パネル展で、災害の写真を展示し、来場者と話しながら災害を伝承する。伝承することの大切さを学ぶ。

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

- 当時の写真を前にすると、予想した以上に話が引き出せた。
- 当時の事を知る人の語りによって、ハザードマップのみを用いるより災害の自分ごと化が進んだ。
- 記録と記憶の継承ができる。

＜参加者等から見た効果＞

- 災害について話し合い、経験・対策を後世に残すことは大事なことと認識した。
- 災害を身近に考えることができた、自分の心構えを新たにしたい。
- 初めて知ったことがあり、またやりたい。
- 参加者（子供含）は災害に対して意識をし、次の行動に移そうとする意見が多くあった。

本当にこれで良いのか！防災訓練！

【活動内容の特徴】

活動内容の特徴を一言で

武儀地域は2年前の平成30年は豪雨災害にみまわれ、津保川沿いを中心に多くの家が被災した。しかしながらその後においても具体的な対策や検討が進んでいなかった。この為、自治会武儀支部の取り組みとして、武儀地域を３つの地域に分けて地域毎に3つのテーマを基に防災勉強会を開催した。

【団体の紹介】

（対象地域）・関市武儀地域
（富之保、中之保、下之保）26自治会
（研修内容）・避難について、　・避難所について
・要避難者について
（研修目標）・地区防災計画の策定を目指している
（参加人数）・対象人員200名　　実参加者80名

【アピールしたい防災活動の成果】

昨年の防災訓練で各避難所までの避難経路や避難場所について、住民で話し合って頂いたが、自治会役員のスキルや災害に対する温度差を強く感じ、とても実効性の有る訓練とは思えなかった。この為、自治会長を始めとする自治会役員を中心に勉強会が必要だと感じ、今年度の最重要課題としてに位置づけた。目標を来年度の防災訓練に向けて地域の特色や特性を踏まえた計画を検討した。

【活動内容の詳細】

武儀地域は全26の自治会から成り立っており、山間部特有の地形であったり、高齢化率も全体では50％近く、中には50％を超える自治会もあるなかで、2年前の津保川の豪雨災害を鑑みますと、住民が主体となった何かをしなければと強く感じた。

そこで、自治会として何ができるのかを考えた時、地区防災計画をそれぞれの自治会に作成して貰う必要を感じ、この為、勉強会を開催し、その上で来年度の防災訓練の実施方法を住民で考える機会を作る。

タイトルにあるように、従来の防災訓練は関市総合防災訓練にあわせて全自治会が参加しているが、大半の自治会は招集サイレンが鳴る前から避難所である集会所に集まってきており、自治会長は時間がきたら安否を確認する事もなく市に対し集合人員を報告し、集まった人に、パンとジュースを配って「ご苦労様です」と言って終わるのが防災訓練であった。

本当にそれで良いのか？これを何百年続けたとしても、災害時に活るとは到底思えない

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

自治会長は1年で交代である。次年度以降の活動や長期に渡る計画について関心が薄い。そんな中で住民同士が協働し自助・互助・共助・公助の町づくりに一歩踏み出した。

＜参加者等から見た効果＞

自治会として組織的な繋がりができ、自治会長のみならず、他の役員の責任・役割分担ができた。
自主防災組織の必要性を感じさせられた。

地元企業と小学生が共に避難所の社会課題を解決する！「避難できる庭」プロジェクト

【活動内容の特徴】

地域企業と小学生で創る、避難できる庭

柳津小学校４年４組と地元建設会社である三承工業が共同で、実際に庭の完成を目指すプロジェクト。子どもたちが災害について社会の授業で学び、その知識を生かして２月に完成するモデルハウスの庭を８グループに別れて設計。その施工を三承工業が行う。

【団体の紹介】

・岐阜市立柳津小学校と岐阜市水主町に本社を置く三承工業の共同プロジェクト。羽島市小熊町のモデルハウスに実際に避難できる庭を施工予定。（竣工は３月）
・４年４組３５名、同社レジリエンス事業部５名で行った。

【アピールしたい防災活動の成果】

授業の知識を生かし、避難所不足の社会課題を解決！

○柳津地区の避難所収容人数を学び、避難所不足の問題の解決へ

災害時には避難所に避難すると学んでいる子どもたち。しかし、実際に日本全国で避難所は不足状態にあり、コロナ渦では更に不足の事態に陥っている。地域の避難所の収容可能人数を学び、平時はアウトドア体験を通して防災力を身につけ、災害時には避難を想定した庭を共に設計した。災害をより身近に感じ、避難生活を細かく考えて万が一の備えまで考え、知識をアウトプットした。社会で学んだ知識だけではなく、理科・算数・国語の授業で習ったことも生かされた内容となった。社会の課題をみんなで解決できるんだ！という子どもたちの自信にも繋がった。大人顔負けの配慮が行き届いた設計が完成した。

（4年4組1班が考えた避難できる庭。
理科で習った砂利の特性を生かして砂利の部分を作り、国語で習った根の張る木を植えた。
畑に野菜を植えて災害時にも備える。
近隣住民2軒も避難できるよう考えた共助の庭。
算数を使って面積を計算し、予算も算出した。）

○家族で自助共助を共有する、具体的なアクション

学んで考えるだけで終わるのではなく、授業の最後には家に帰って実行する具体的なアクションも一人ひとり考えた。家に帰って家族と話し合ったり防災グッズを近所の人の分まで用意するなど意見がでた。

【活動内容の詳細】

両隣２軒と自分の家族が避難できるよう想定し、上限600ポイントの中でグループで進める避難できる庭づくり

○近所にどんな人が住んでいるのか違った想定を各グループに用意し８班に分かれて避難できる庭を考えた。
○上限は600ポイント（60万円分）と設定し、芝やコンクリートは平米あたりの計算も活用し、予算内のポイントに収めた。また、それらを発表し、様々な防災アイディアを共有した。
○最後にはガーデンデザイナーが皆の意見をまとめ、2021年3月に避難できる庭を施工する。

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

子どもたちが自助・共助を意識して庭を考える姿にとても感動しました。これまでの学校生活で学んだ要素がたくさん庭の設計に入っていて、改めて災害と自分たちの生活そのものが近く感じられたのではないかと思います。子どものアイディアも立派に社会課題を解決できる要素なんだと、皆自信に繋がったと感じています。

＜参加者等から見た効果＞

「ただ遊ぶだけのはずの庭が災害時に役立つという視点は、新たな価値を子どもたちが自ら生み出した瞬間でした。」担任五島先生談
「避難所について考えたことがなかったから、おうちの人ともっと災害について話し合いたいし、もっと考えようと思う」生徒談

地域復興計画を含めたBCP策定と モデルハウスの避難所活用

【活動内容の特徴】

地元建設業者だからこそできる、防災・減災

地元密着中小企業として日頃業務を通して培われる岐阜の土地・風土の知識。それらを生かし、災害時の地域の復興計画を含んだBCP（事業継続化計画）を策定した。さらに災害時に避難所として活用可能なモデルハウスの建設にも取り組んでいる。

【団体の紹介】

SUNSHOW GROUP
活動拠点：岐阜市水主町２丁目５３番地
活動の取り組み期間：４年
現在の活動人数：５６名

【アピールしたい防災活動の成果】

2016年から始めた防災への取り組みが、地域の防災・復興計画を考えるまでに向上

当初は外国籍のお客様へ住宅の提案を行う際に日本の災害について知って欲しいという想いから始まった防災への取り組み。年々、防災のワークショップを開催する中で安心・安全に暮らして欲しいというスタッフの想いは大きくなり、モデルハウスの避難所活用を標準化し、どの事業部でも当たり前に防災について考える社風となった。スタッフ・お客様だけでなく、地元建設業者だからできる復興計画も考え地域に貢献していく。そのような取り組みが評価され、**内閣官房国土強靭化計画民間の取り組み事例集にも掲載された。**

◀　掲載された
内閣官房国土強靭化計画
民間の取り組み事例集

【活動内容の詳細】

地元中小企業であることを最大限に生かした、地域防災への取り組み

○モデルハウスの避難所活用とキャンプできる庭を標準化

モデルハウスに近隣住民のための備蓄品と、発電機、雨水タンクの設置を義務化することで災害時には炊き出しや充電スポットとして活用でき、雨水タンクの水はトイレ用の水として配布可能。キャンプできる庭では平時はキャンプを通して野外活動を体験でき防災力を向上させ、災害時は避難所として活用できる庭を施工。

⇧2020年10月に竣工した避難所活用できるモデルハウス

○防災教育の定期開催

野外活動やワークショップを2016年より累計10回以上行い、地域の子どもたちに防災を体験してもらうことができるように「レジリエンス教育（防災）」を実施。

○地域復興計画を含んだ地元建設業者としてのBCP策定

災害時、誰がどのように誰と連絡をとり重機を動かして復興にあたるのかなどの人員計画を含めたBCPを策定。地元建設会社だからこそできることを考え、迅速に地域復興にあたる準備を整えた。

⇧原始的な方法で火起こしを学び災害時に備える
火起こし親子ワークショップの様子

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

事業を通して地域防災に取り組むことで、**社内だけではなく、お客様・取引先・地域住民の方々と防災に取り組むことができた。**

＜参加者等から見た効果＞

「ワークショップを通じて、子どもと防災について考えるきっかけができ、本当にいい体験になりました！」ワークショップ参加者談

地域を支える中学生の育成：発災後編プログラム

～助けられる側から助ける側へ～

【活動内容の特徴】

状況に応じて判断し、支援する力を育む

突如学校が避難所となった想定で、事前の打ち合わせや情報がない中で、突発的に生まれる状況に併せて対応せざるを得ない状況をつくり、中学生が支える側として考え・活躍できる人材育成をめざす。

【団体の紹介】

- 岐阜市立本荘中学校
- 生徒数460人
- 「ひとりだち」を学校の教育目標に掲げ、自ら考え、判断し、行動する生徒の育成を目指している。
- 地域と協働した防災活動3年目

【アピールしたい防災活動の成果】

生まれた２つの気付き：①対応できた自分　②対応の難しさ

いざ災害となったときに、突発的に起きる様々な状況に対して、生徒たちがどのような行動をすべきかを主体的に考える機会となった。予想外の避難者等に対して、時には上手く行動できなかったことも体験し、対応の困難さを知ることもできた。

【活動内容の詳細】

「助けられる側から助ける側へ」

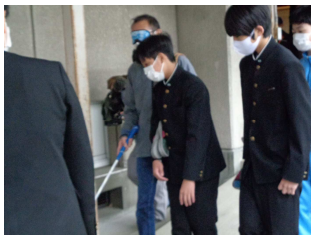
本荘自治会との連携により、地域の消防団、保健センター、包括支援センターなど多くの方々の全面的協力を得て、地域の学校としての防災学習となった。

①防災学習を行うとだけ生徒に伝え、生徒が考える場面を意図的につくり実施した。防災倉庫の見学はタブレット端末を活用。

②当日の朝、生徒のボランティア・スタッフを募り、その場で仕事内容(検温係、総合受付、避難者の誘導等)を伝え、各自で考えて行動するようにした。

③生徒たちは、突如避難してくる様々な人たちの対応を行い、避難場所へ誘導した。視覚障がい者、聴覚障がい者、赤ちゃんを抱いた母親、妊婦、認知症の高齢者等に対して、戸惑いながらもその場で対応を考えて行動できていた。

④最後に避難誘導された方々からも感想を聞き、「その人の立場になって親身に考えて対応してもらえた。」と生徒の対応よさを讃えられた。



【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

・スタッフとなり、それぞれの役割を担った生徒たちは、自分たちで「どのように動いたらよいのか」を考え、一生懸命に行動できていた。誘導にあたった生徒は相手の身になって寄り添い、温かく誠意ある対応ができ、想像以上であった。誘導される立場の方からも「感激しました。」と賛辞を頂いた。

＜参加者等から見た効果＞

・いざ災害となった時には、予想できない状況下で、自ら考え、対応しないといけないことを実体験できた。

・自分ができること、できないことや気付かないことにも気付くことができて有意義であった。また、タブレットは、学習だけでなく、災害時の情報共有ツールとなることもわかった。

いま！出来る事

【活動内容の特徴】

援助者へのturning point

「誰かがやってくれる」「誰かが指示してくれる」受動型の避難所は、多くの課題を抱えて開設する。いま自分に出来る事は何かと気づき考え、避難者から援助者へ切り替える事が出来る地域力向上を目指す。

【団体の紹介】

- 岐阜市本荘地域
- 平成22年～現在(10年)
- 現在の会員人数(実働30人／100人)
- 『避難所ではだれもが主役である』出来る者が素早く行動に移せる世代を超えたチームである。

【アピールしたい防災活動の成果】

できない理由ではなく、できる理由を探す

過去の避難所開設訓練で設置に不便を感じたと声が上がった例えば、「段ボールベット」会議椅子と作るベットで改善できた。時代に即した情報収集で、年代を超えた運営スタッフへの協力体制を整えることが出来た。

【活動内容の詳細】

「他でやれて本荘ができない事は無い！」をテーマに企画

誰もが安全に安心して災害を乗り切るために活動する

①東日本大震災時に車いす避難で押しだけでは坂が上れないと考えられた「人力」高齢化が進む地域には必要と2011年防災訓練より備蓄に加える。

②シルバーカーに頼ることで、室内避難に躊躇がある方には、そのまま上がれるスペース確保方法を考える。合わせて靴底に厚み差がある方には、靴カバーを準備する。

③個々の情報を何度も聞き取るのではなく、一度の記載できる用紙を配布して、避難所運営者間で情報共有できるシステムを構築しつつある。特にアレルギーについては被災時に助かった命をなくす危険があるため特に専任者を置く。

④ピクトグラムの活用は、岡山消防で誘導に効果があったとされるもの。聴覚障害者への情報伝達も望める。固定観念に拘らず活用に取り込みたい。

何度も問わずに情報一元化カード ③

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

本年はコロナ禍で行ったためポイントが絞れ、9月18日（大人）11月7日（中学生）11月23日（大学生）同じ課題に世代の違いで対応の違いが見えた。参加者が、同一避難所で動く時は、互いを理解して活動できる環境を整える必要性に気づく事ができた。誰かがではなく自分が動ける援助者になるために。

＜参加者等から見た効果＞

・避難者の立場を経験して、受け入れ側になると、寄り添い方が理解できた。

・出来る事を言葉に出して、行動する体験は、いざという時生かすことが出来る。

・コロナ禍だからこそ実践型受け入れ訓練は貴重な経験となった。

・行動できる避難者となろうと感じた。

大切な人、巻き込んでいますか？
身近な人と共に一歩を！

【活動内容の特徴】

機会や人脈はフル活用

・防災は“人のつながり”そのもの。求められれば、どこへでも行きます。
・色んな人をとにかく巻き込む。
・いつでも大真面目に考え、ワクワクしながら動きます。

【団体の紹介】

・可児市を中心としつつ全国展開
・平成29年3月～現在(3年半ほど)
・２人
・げんさい楽座で出会い、その後夫婦になりました。

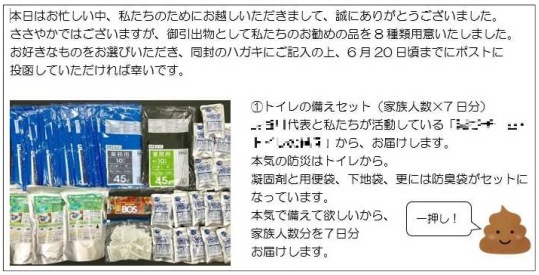
【アピールしたい防災活動の成果】

家族や親しい友人とやる防災は楽しく実用的

大切な家族が集まる場で伝えなくてよいのか？いや、それはよくない！という想いから、前代未聞の披露宴を決行。そんな私達を認め、受け入れてくれる家族と友人のお陰で、楽しく身になる活動が続いています。

【活動内容の詳細】

いつでも「参加・巻き込み型」


本日はお忙しい中、私たちのためにお越しいただきまして、誠にありがとうございました。
ささやかではございますが、御引出物として私たちのお勧めの品を８種類用意いたしました。
お好きなものをお選びいただき、同封のハガキにご記入の上、６月20日頃までにポストに投函していただければ幸いです。

①トイレの備えセット（家族人数×7日分）
[illegible]代表と私たちが活動している「[illegible]」から、お届けします。
本気の防災はトイレから。
凝固剤と用便袋、下地袋、更には防臭袋がセットになっています。
本気で備えて欲しいから、家族人数分を７日分お届けします。
一押し！

防災のことをたくさん盛り込んだ「全員参加」の披露宴
　トイレの備え勉強タイム、ビンゴ景品も防災をアピール、
　オリジナル引出物カタログの目玉はトイレの備え
家族は当然巻き込む
　イベントで人手不足！→スタッフは身内と友人
活動着などのグッズ作りにデザイナーの友達を巻き込む
　そして防災について感化する
喜んで巻き込まれる
　呉まで行った。そこから得た大きなもの二つ
バルーンアートが得意な友人も巻き込む
寄付活動では仲間を募り・・・
　職場や友人に声掛け、合計４台のファンヒーター
　代を寄付できました
まさかの偲ぶ会でもトイレ・・・
　私がしなくても大丈夫、出来るメンバーがいる

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

楽しい。
自分達らしい。
納得できる。
その人に響く手法を知っている。
巻き込んでみると、実はみんな喜ぶ。
アートの力はすごい。
反対に、更に返ってくる。

＜参加者等から見た効果＞

楽しさに巻き込まれる。
参加型で印象に残る。
偉い先生が言うよりも響く。
備えに繋がる。
一度口に出したことは、行動まで導かれる。
（口先だけは許されない）
アンテナができて自ら情報をキャッチする。

市民が発信するラジオによる防災力の向上

【活動内容の特徴】

市民メディアにより防災意識の向上

まず市民自らが防災減災に関する情報発信ができるようになる。そしてシンポジウムやラジオ放送などメディアを活用することにより、より広く多くの市民に防災減災についての内容を伝え、防災意識をより高め、関係する活動の活性化を目指す。

【団体の紹介】

みんなのラジオ「てにておラジオ」

- だれもが番組を作ることができる市民による市民のためのラジオ
- 2017年6月発足。みんなの森ぎふメディアコスモスを拠点に、毎月第２第４日曜日に公開収録、会員自らがラジオ番組制作。
- FMわっち78.5MHzで毎週放送。
- 個人会員37、団体会員1

【アピールしたい防災活動の成果】

ラジオを活用し地域の防災力を向上

災害時に情報入手ツール第１位のラジオを活用し、市民自らが情報発信する。家事や仕事をしながら聴くことができ、若者の活字離れにも対応できる。災害時にも情報入手そして情報発信が出来る市民を増やし、地域全体としての防災力を高める。

ぎふメディアコスモスで公開収録

【活動内容の詳細】

情報弱者にも優しい情報発信で大きな共助

手軽な情報ツールの一つであるラジオは情報弱者にも優しい。発信するのはハード＆ソフト面で難易度が高い。日常的な取り組みが必要。平時は市民活動を広く扱う市民メディアとして活動。

- **月１回　専門家を招き防災勉強会**、行政担当者と打合せ
- **第２第４日曜日**　１回60分4枠構成の番組を２週分収録
- 毎週放送する番組の約20%が防災減災に関する内容
  - 通常番組（歴史、災害対策、医療福祉、食育、整理術など）
  - 特別番組（2枠以上連続：防災シンポジウムなど）
- 防災シンポジウムを企画運営　岐阜市と共催 2020/1/12開催

みんなの森ぎふメディアコスモスは、市立中央図書館、市民活動交流センター、多文化交流プラザの複合施設で、岐阜市における防災拠点として位置づけられている。様々な情報が集まり、市民活動および外国人などの情報弱者への窓口ともなっている。

この取組は、地域としての情報発信＆情報入手を促進し、公助と自助をつなぐ共助を大きく担うものである。

専門家を招き防災勉強会

防災シンポジウム

【活動成果】

＜実施者から見た効果＞

大学、高専、防災士、地域リーダー等の防災に関わる専門家の見識を得て、地域づくり活動の実践者、行政担当者、若者たちに防災減災の意識啓発ができるようになった。また番組作りを通して、これら取組をより多くの市民に放送メディアとして伝えることができるようになった。

＜参加者等から見た効果＞

勉強会や公開収録の参加者からは、高い評価を得ている。食育や整理術が防災につながるなどの意見もある。年２回開催している番組審議会で話題となり、多くの評価と改善点を得ている。海外のリスナーから反応もあり、発信・啓発は相当できているものと思われる。番組を録音したCDの依頼もある。